

有機農業を通して生活の価値感を変え町作りを

片山 元治 (愛媛県/無茶々園・事務局長)

20年前に有機農業をはじめ、現在50町歩あまり、町内の1割に当たる70世帯が無茶々園のメンバーです。自分たちが有機農業をはじめたとき、「有機農業、という言葉は知らなかったが、当時みかんが生産過剰で暴落して、せっかくなりだした木を切って切り換えなければならないことに非常に疑問をもったわけです。なんとかしようということになったわけですが、紀伊国屋文左衛門がみかんを作ったころは農薬も化学肥料も使っていなかった、だから原点に戻ってそういうみかんを作ろうじゃないか」といってはじめたのが最初です。

その後いろいろな人と接するうちに有機農業がどういふものか、そして自分たちの生き方がどういふものかだんだんわかってきました。東京で1日生活するのに1万円かかるとすると、田舎で5千円で充分気持ちよく生活できる生き方をしようじゃないかと。そういう生き方を大切にしていくなめには生活の価値観も変えていかなくてはいけない。魚釣りにいってつれたての魚を食べるとか、とれたての新鮮な野菜を食べる、これは田舎で生活するものの特権で最高のぜいたくではないか。気持ちよく生きていくというのがどういふことかという、農業は3Kとかいわれていやがられますが、ガンガン日の照る時に草刈り機を持って働けば汗が1升も2升もでる、帰ってキューッと飲むビールの味は格別で、東京の人がいくらうまいといっても自分たちの飲むビールのほうがうまいだろうと思っています。こういうことが本当の労働ではないか。今までは労働をお金で計っていく生き方をしてきたが、これからは自分の本当に生きがいのある仕事をして生きていくということが大切になってくるのではないかと。

それは農業でもいえることで、今の化学肥料や農薬を使う農業は21世紀には通用しないだろう、

21世紀は有機農業の時代になるだろうと思っています。

今の有機農業は一般には懐古農業です。昔は化学肥料も農薬も使わなかった、堆肥を中心に育てて来た、だから今でも育つということをやってきました。しかし、有機農業が異常気象で被害にあって収量が半減したり、3割、4割やられたという年が2~3年続きました。これではいけないということで専従を一人つけて、日本全国はもちろん、世界中から情報を集めて勉強し、今なんとか本当に無農薬でやっていけるのではないかとという展望が持てました。その中で21世紀の農業技術は有機農業の技術になるのだと思っています。

農薬とか化学肥料を使わない農業を真剣に科学しようとする人が全国にはたくさんいます。その人たちは大学とか研究機関のようなきちんとした研究施設をもってはいませんが、百姓のカンというか最先端のセンスをもって技術を開発しております。簡単にいいますと、まだ見えない微生物が本当は人間も含めて動植物を病気などから守る能力をもっている。たとえば抗生物質などはほとんど土の微生物の中から出て来ている。微生物が出した抗生物質で大きな傷がなおるようなことが昔から受け継がれてきたというか、感覚的にわかっていて、それを今きちんとした農学として技術づけられるだろう。こういったことが生命の科学になっていくのではないかと。それが21世紀にはっきりしてくれば、ハウスで作った野菜と露地で作った野菜がどう違うかということがわかってくるのではないのでしょうか。

今までは生きて行くために一生懸命働いて、賃金が安いといつてストライキをやったということをやってきたが割りにあわなかった。これからは食べ物があるところをベースにするか、田舎の者と本当につきあって好きなことをすればいい

い。そして企業の利益を合法的にどうピンハネすることができるか、みなさんと真剣に考えていきたいと思っています。

企業というのは神様と一緒に信者がいたら大きくなる。企業の中にいたら会社のために一生懸命にがんばるというふうになってしまう。それは宗教と一緒にです。そういうものに生きがいを感じるよりむしろ、どうしたらのりくらりと気持ちよく生きて行けるか、こういう生き方をしないとい

けないのではないだろうか。

我々は動物から脱していないくて、やはり汗流して働かなくては気持ちが悪い。一日一回汗を流すと食べ物がかうまい。この世で一番うまいグルメは腹がへったときに食べるのが一番のグルメだ。我々田舎者もそういうふうには価値観を変えるし、町の労働者も価値観を変えてもらって、お互いの価値観が同じになってくると世の中さうとうおもしろくなると思います。

「無茶々園その活動と歩み」より

無茶々園の誕生

昭和49年5月、有機農業の研究園作り、これを「無茶々園」と名付け本格活動を開始した。

昭和50年～53年までは実験段階であったといえる。50年に伊予市で自然農法を実践している福岡正信師の指導を受けて、無茶々園は無農薬、無化学肥料栽培を開始した。昭和52年産の伊予柑を松山市の自然食品店に引き取ってもらい、初めて、「無茶々園蜜柑」として値段がついた。この店との出会いは、食物と健康の関係、あるいは理想の農業に近づくためには、農業の問題から出発して、食生活、健康、社会環境、教育などに至るまで考え考慮する必要があることを教わり、そのためには無茶々園の運動を単なる農産物の生産方法の問題ではなく、食生活、社会教育など町作りの活動に広げていかなければならないということ学んだ。

昭和53年はマスコミが無茶々園を取上げ、一躍全国に知れることとなった。そのおかげで無茶々園は多くの理解者、指導者を得ることができ名実ともに動き始めた。

ノートピア（百姓の理想郷）をめざして

昭和54年から無茶々園は会員各自の園での試作段階にはいり、面積を1ha程に増やし、温州蜜柑、伊予柑、甘夏柑に取り組んだ。ところが、収穫直前に病虫害が発生、また折あしく蜜柑の生産過剰で思うように販売できず、惨めな現実をつきつけられた。この苦節を教訓にして昭和55年2月にはメンバー6名が上京して栽培技術から販売に至るまで勉強した。おおくの交流のなかで学び、町内全体の無茶々園化、無茶々園の町作り構想へと進化していった。

この年、無茶々園規約をつくり、機関紙「天歩」の発行を始めた。

昭和62年には農協も有機農業部会として無茶々園を認めることを理事会で決定した。有機農業を目指す農家はほとんど農協に失望してやめていくのだが、現状はどうしようもない農協かもしれないが百姓のシンボル組織であることに違いない。必ず近いうちに主導権を貰い受ける。

昭和63年には会員55名、面積34ha、生産量700トンとなった。

平成2年には会員数も面積も町内全体の1割を越え着実に若い農業者に浸透していった。